

してきた。
最近では、身近にあるが本来は外来種である植物をクローズアップで捉えた「Radial Systems」シリーズを制作している。

前回は続き、今回の審査でも満場一致や大きな票差で決定された賞はなく、円卓を囲み投票を繰り返し、多角的な意見交換と議論を重ねながら各賞が決定された。昨年は3人、今年は2人、8人中5人の審査委員がこの2年で見替わったわけだが、それぞれの意見の食い違いはあっても、議論を尽くして決定していく東川賞審査会の伝統的なスタイルはしっかりと継承されている。

こうして審査に取り組むことができるのも、1985（昭和60）年の「写真の町宣言」から30余年、一步一步積み重ねた町の人たちの努力に支えられていることを実感し、深く感謝する次第である。

審査会は、「写真文化首都」にふさわしい素晴らしい作家たちを選出できたと自負している。受賞した素晴らしい作家たちを加え、東川町の人々とともに、さらなる一歩を踏み出していきたい。

写真の町東川賞審査会委員
上野 修

審査委員は以下の通り。（敬称略、五十音順）

▼上野修（写真評論家）▼北野謙（写真家）▼楠本亜紀（写真評論家、



庄市生まれ、47歳。1989（平成元）年から写真の制作を開始。1994（同6）年に東京総合写真専門学校卒業。

1990年代半ばから、街に集い、行き交う人々を至近距離から撮影し、緊張感のある構図でとらえたストリートスナップをモノクロプリントで発表。『MOLE UNIT No.7 猿人全快』（MOLE、1999年）を出版するほか、個展や海外でのグループ展に参加。

2010（平成22）年からカラー作品の制作をはじめ。主に自身の生活圏で撮影された写真は、日々のなかにあるかけがえのない光や時間をとらえている。言葉になりにくい、風や匂といった体の記憶を喚起させるような独特の質感のある写真集『ラジオのように』（オシリス、2011年）、

ビターオレンジの花から抽出されたオイルを意味する「NEROLI」の香が漂うような、濃縮されたイメージをとらえた『NEROLI』（赤々舎、2016年）、最新作を集めた『MARBLE』（タカ・イシイギャラリー、2018年）などを出版。瞬間の光を忘れたくないイメージに昇華させた作品は評価が高い。

キュレーター）▼柴崎友香（小説家）▼中村征夫（写真家）▼丹羽晴美（学芸員、写真論）▼原耕一（デザイナー）▼光田由里（美術評論家）

＜海外作家賞＞
マリアン・ペナー・バンクロフト（Marian Penner Bancroft）氏
カナダ・バンクーバー市在住。



1947年カナダ・ブリティッシュコロンビア大学、バンクーバー美術学校（現エミリー・カー美術大学）、ライオン工科大学（現ライオン大学）で学ぶ。1981年からエミリー・カー大学で教鞭をとり、後進を育成。バンクーバー・アート・ギャラリー、カナダ国立ギャラリーほか、国内外で展覧会を多数開催している。

1970年ころから写真に撮影される対象との関係性を重視したドキュメンタリースタイルの作品を制作。白血病を患った義理の弟と、それを支える妹をとらえたシリーズで注目を浴びる。1980年代からポストコンセプチュアル写真の文脈で重要な写真家を輩出したいわゆるバンクーバー・スクールのメンバーたちと並走しつつも独自の活動を続ける。

主な個展に、「NEROLI」（タカ・イシイギャラリー、フォトギャラリー/フィルム、2016年）、「MARBLE」（同上、2018年）、主なグループ展に「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14」（東京都写真美術館、2017-18年）がある。

＜特別作家賞＞
大橋英児（おおはし・えいじ）氏
札幌市在住。



1955（昭和30）年稚内市生まれ、62歳。1998（同50）年から2000

6（平成18）年まで、「人間」とつての幸福は何か」をテーマに、ネパール、パキスタン、チベット、中国西域の広大な自然と、そこに暮らす少数民族をとらえたドキュメンタリー作品を制作。

2010（同22）年からフランスとなり、商業写真のかたわらで日本という国を象徴する最もありふれた風景の一つとして、「自販機のある風景」シリーズの撮影を始める。日常の街角だけでなく、ほとんど人通りもないような山間部や最果ての岬から、東日本大震災後の瓦礫のなかに至るまで、日本各地に偏在する自販機のある風景は、日本の社会の縮図でもある。

1980年代から'90年代にかけては写真のほかに言葉、音、ドローイングを用いた大型作品を制作し、彫刻的なインスタレーションを行う。

記憶、体、風景といったテーマを一貫して扱いながら、家族の歴史やヨーロッパとスコットランドにルーツをもつ入植者の少女として、自身が幼少期に受けた教育に焦点をあて、アイデンティティの形成について探究する作品を制作している。

2000年からはカラーを用い、移民の問題やカナダの原住民とヨーロッパからの入植者との複雑な関係に踏み込んだ作品を制作。近年では身近に繁殖する帰化植物を通して人間の媒介によって地球規模で引き起こされる移住に焦点をあてたシリーズ「Radial Systems」を発表している。

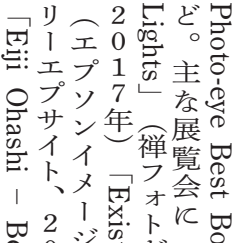


＜国内作家賞＞
潮田登久子（しおだ・とくこ）氏
東京都世田谷区在住。

1940（昭和15）年東京都生まれ、78歳。1963（同38）年、桑沢デザイン研究所写真科卒業。1966（同41）年、桑沢デザイン研究所と東京造形大学講師。1975（同50）年、フ

自販機をテーマとした主な出版物に、北海道の雪景色のなか、煌々と光を放つ自販機と、その光で照らされた柔らかな雪が織りなす幻想的な光景をモノクロでとらえた『MERCYメルシー』（窓社、2015年）、モノクロで撮影した写真をまとめた『Being There』（Case Publishing、2017年）、カラー写真をまとめた『Roadside Lights』（禅フォトギャラリー、2017年）/Photo-eye Best Books受賞）など。主な展覧会に「Roadside Lights」（禅フォトギャラリー、2017年）「Existence of」（エプソンイメーキングギャラリー、エプソンサイト、2017年）、

「Eiji Ohashi - Being There, Roadside Lights」（Case Rotterdam、2018）などがある。近年では海外での評価も高まっている。



1926（昭和元）年三重県生まれ、91歳。特攻隊志願兵として終戦を迎える。

運輸省東海海運局、日刊スポーツ新聞社を経て1951（昭和26）年人事院広報課に勤務。

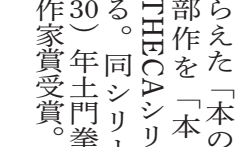
＜飛騨野数右衛門賞＞
富岡畦草（とみおか・けいそう）氏
神奈川県茅ヶ崎市在住。

リーランスの写真家活動を始める。1981（同56）年から日々の生活を写真に記録する中で、不思議な存在感を放っていた冷蔵庫の撮影をはじめ。表には出てこない家庭の多様な暮らしが目に取れる「冷蔵庫」シリーズとして発表。

布彫刻としての「帽子」をとらえたシリーズほか、1981（同56）年から2001（平成13）年にかけては写真家の夫・島尾伸三と中国の庶民の生活のレポートを行い多くの共著を手がけている。1995（同7）年からは本と本の置かれている環境を主題に撮影を始める。1996（同8）年に解体されたみず書房の旧社屋と、そこで働く人々を記録したドキュメントフォト「みず書房旧社屋」（幻戯書房、2016年）、

恩師である故大辻清司の自宅のアトリエを撮影した「先生のアトリエ」（ウシマオダ、2017年）、図書館や個人宅に蔵された歳月を経た本の圧倒的なたずまいをとらえた「本の景色」（同上）の三部作を「本の景色／BIBLIOTHECAシリーズ」としてまとめる。同シリーズで2018（同30）年土門拳賞、日本写真協会賞作家賞受賞。

＜新人作家賞＞
吉野英理香（よしの・えりか）氏
埼玉県本庄市在住。



1970（昭和45）年埼玉県本

焼け野原になった日本のこれらを記録に残さねばという気持ちで原点に、仕事のかたわら、記録写真を始める。「同じ町や物を、同じ所から、同じカメラを使って撮り続けた写真、あとで並べて見れば、きつといういろいろなことがわかるだろう」ということから、「定点観測式撮影法」を提案。首都圏の主要な駅前、交差点、広場、車道などで定点観測記録写真を続け、高度成長期の東京の変貌をとらえている。

都市の記録とともに、家族の成長記録も残し、1958（同33）年、「母と子の1000日」で第1回日本写真協会新人賞受賞。現在も継続中の銀座四丁目交差点での家族定点撮影は、家族の記録であるとともに、街の風景、道行く人の変化の様子も同時にとらえられている。

主な写真集に「車が輝いていた時代―富岡畦草記録写真集」（日本カメラ社、2003年）、「富岡畦草記録の目シリーズ」変貌する都市の記録」（白揚社、2017年）など。現在でも、雑誌「日本カメラ」にて「富岡畦草の記録する日々」我が写真回想記」の連載を続けている。娘の富岡三智子、孫の鶴澤碧美が、それぞれ二代目、三代目富岡畦草を引き継ぎ、定点撮影を継続して行うほか、40万枚にも達する膨大な写真を保存管理している。

1926（昭和元）年三重県生まれ、91歳。特攻隊志願兵として終戦を迎える。